

大井手川用水とやな場

— 熊本県上益城郡甲佐町 —

(一財)九州環境管理協会 林 田 創

1. はじめに

熊本市の中心から車で南下し、嘉島町を抜けて右手に緑川を望みながら上流に向かうと、40分足らずで甲佐町のやな場に着く。大井手川用水にある鮎やなを眺めながら、茅葺きの東屋で鮎料理を楽しむことができる施設である。

大井手川用水とやな場がある甲佐町は、熊本県のほぼ中央、熊本市の南方約20kmに位置し(図-1)、町を緑川が南北に貫流している。緑川は、熊本と宮崎県境の向坂山や小川岳の西麓に水源を持ち、熊本県のほぼ中央部を東から西に流れ有明海に注ぐ一級河川である。

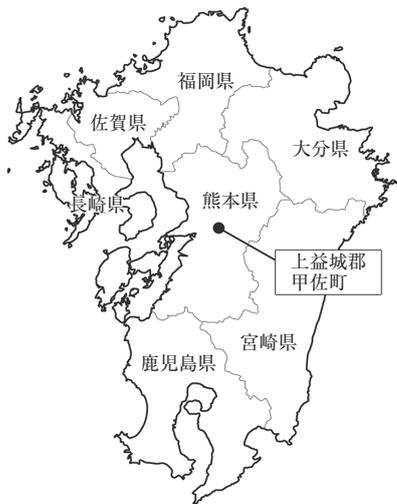


図-1 甲佐町の位置

2. 清正侯と治水・利水事業

大井手川用水の開削にかかわった加藤清正侯は、尾張国(現在の愛知県)の生まれの戦国武将である。天正16(1588)年に27歳で肥後熊本に入国し、慶長16(1611)年に50歳で死去するまでの23年間にわたり、領主としてこの地を統治した。清正侯が治水・利水事業を本格的に展開したのは、関ヶ原の戦い後に肥後南半を含めた肥後一国の領主となった慶長6(1601)年からの約10年あまりであったと記録されている。清正侯が行ったとされる事業では、緑川の鶴

ノ瀬堰、球磨川の遥拝堰、白川の渡鹿堰の築造のほか、各地の塘と呼ばれる河川堤防、石刻と呼ばれる水制工の工事がよく知られている。このため、清正侯は熊本では土木の神様として、「清正公(せいしょうこう・せいしょこ)さん」と呼ばれ敬愛されている。

3. 鶴ノ瀬堰と大井手川用水

鶴ノ瀬堰は、緑川左岸の甲佐町東寒野から右岸の豊内へ、水の抵抗を和らげつつ取水するために、緑川に斜めに設けられた長さ約600mの堰で、清正侯の緑川河川工事の中でも代表的なものである。増水による破壊と改修を重ね、現在ではほとんどがコンクリートで固められているが、築造当初は石畳と石積みで作られていた。

この鶴ノ瀬堰に取水口を設けて、緑川の氾濫地帯を水田化するために開削されたのが大井手川用水である。その工事は慶長12(1607)年とあり、鶴ノ瀬堰の普請と同時に行われたようである。上豊内の取水口から岩下、糸田を経て、糸田堰からの水路と合流している。この水路は現在でも一帯の田畑を潤すとともに、地域の生活用水として大切に受け継がれており、その流れを見ると甲佐町に来たことを実感する(写真-1)。やな場は、この大井手川用水が始まる上豊内にある(図-2)。



写真-1 町なかを流れる大井手川用水(令和3年8月撮影)

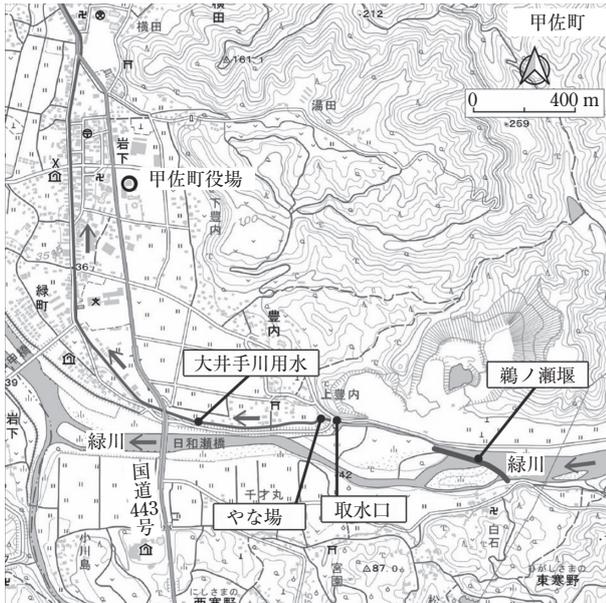


図-2 鵜ノ瀬堰と大井手川用水、やな場の位置関係

4. 御やなの始まり

落ち鮎用のやなは、鮎が降下する川筋に、竹で編んだ簀の子を敷き詰めて水を濾し、鮎を捕るものである(写真-2)。大井手川用水のやな場はかつて細川藩が管理しており「御やな」と言われた。本来は河川の上流から運ばれた土砂などの堆積物を留める機能も持っていたらしい。

この甲佐町のやな場の起源は、寛永10(1633)年に熊本藩主、細川忠利侯の命によって作られたというのが通説であったが、近年、やな場の起源は清正侯にあるという新しい史料が発見された。稲葉継陽著の「歴史にいまを読む—熊本・永青文庫からの発信—」によれば、「甲佐町の文化財保護に関して永青文庫の史料調査を進める過程で、築場の起源の通説を書き換える、決定的な古文書を確認することができた。(中略)甲佐町豊内の鮎築場の起源が清正にあることは確実であ



写真-2 営業再開した鮎やな場 (令和4年6月撮影)

る。年代としては、関ヶ原合戦によって益城郡が加藤領になった慶長5年(1600)にまでさかのぼる可能性がある。築場の設置は清正、復興整備は忠利、というのが事実であろう。」と書かれている。余談だが、鮎やなを復興整備したと書かれている細川忠利侯は、何度となく甲佐のやな場を訪れたり、朝から食膳に上げさせるほど鮎が好物だったらしい。

5. おわりに

甲佐町のやな場は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、令和2年から3年にかけて休業されていた。表紙写真は、実はその休業中に撮影したものであり、用水が豊かに流れているものの、よく見ると東屋に雑草が生え少し寂しい。

しかしながら令和4年からは、地元の若手有志でつくる一般社団法人が運営を担うことになり、3年ぶりに営業が再開された。そこで、さっそく初夏の甲佐町を訪問し、手入れの行き届いたやな場と往年の賑わいを確かめることができた。滋味深い鮎料理の写真を紹介して終わりとしたい(写真-3)。



写真-3 やな場の鮎料理 (令和4年6月撮影)

参考文献

- 1) 甲佐町史編纂委員会：新甲佐町史，pp.927～1003 (2013)
- 2) 大本照憲：加藤清正の治水・利水工法に関する一考察，土木史研究18，pp.265～270 (1998)
- 3) 花岡興史：加藤清正信仰と土木工事，馬場楠井手の鼻ぐり，菊陽町文化財調査報告6，菊陽町教育委員会，pp.192～200 (2016)
- 4) 稲葉継陽：歴史にいまを読む—熊本・永青文庫からの発信—，熊本日日新聞社，pp.71～74 (2020)
- 5) 甲佐町：「甲佐町やな場」について (2022)，<https://www.town.kosa.lg.jp/q/aview/1/430.html> (参照2022年7月20日)
- 6) 熊本日日新聞社：伝統の「やな場」地元若手が新風 甲佐町，6月再開3年ぶり 通年営業，冬場はジビエ料理も，熊本日日新聞 (2022年5月9日付)，<https://kumanichi.com/articles/648970> (参照2022年7月20日)